

『日本漢文学研究』のめざすもの

前総括責任者 佐藤 保

本誌『日本漢文学研究』の創刊に当たり、本誌の母体である二松学舎大学二十一世紀COEプログラム「日本漢文学研究」の世界的拠点の構築」の計画立案に最初から加わっていた者の一人として、本プログラムが採択されるに至った経緯と、本誌のめざすものについて、簡単に記しておきたい。

我々二松学舎大学は、文部科学省の二十一世紀COEプログラムの構想が公にされた直後から、石川忠久前学長を中心に応募の準備に取りかかった。私が参加した最初の会合は、平成十四年（二〇〇二）二月であったと、記憶する。

COE構想は、当初、一件当たりの高額な援助金と、「トップ・サーティ」top thirty という言葉が流行したように、日本の国公立大学の分野別格付けの面のみがことさらに喧伝されたが、実は、このCOEのねらいは、大学の個性化と研究教育水準の高度化をめざすものであること、特に大学院の研究教育の活性化を目的とすることは明らかであった。そこで我々は、COEへの参加が、二松学舎大学の研究教育の改革、活性化を行う絶好の機会であるにとらえ、本学の個性とこれまでの研究教育の実績をいかにCOE構想に結びつけるか、その検討を始めたのである。

平成十四年（二〇〇二）の第一回の公募締切まであまり時間的余裕はなかったが、早い段階で、本学の研究教育拠点形成は「日本漢文」の分野で計画する以外にはあり得ないことが、比較的容易に決まった。なぜならば、本学は開学以来、建学の理念として東洋の精神文化の伝統を継承し、古くから「国漢の二松」と自他ともに認める実績をあげているので、「日本漢文」が最も本学の特色を發揮するのにふさわしいと、全学の考えがすぐにまとまったからである。しかしながら、問題は日

本漢文の研究教育拠点をどのように構築するかである。我々は検討のすえに、漢文による研究教育法の開発と漢文文献のデータ・ベース化を目的とする「日本漢学研究教育法及び文献センターの構築」を計画して、「人文科学」の分野に提出した。だが、結果は不採択となった。理由は、研究の意義は認められるが、計画の具体性を欠き実現は困難であろう、というものであった。

その指摘は、我々としても十分納得の行くものであったので、二年後の再度の申請に備えて、大学院カリキュラムの整備と大学全体の研究教育体制の改編を行い、さらに事業推進担当者の充実をはかった。それと同時に、我々が研究教育の対象とする「日本漢文」又は「日本漢学」「日本漢文学」とは何か、を問い直す議論を重ねた。

議論の前提には、近代以前の日本の学術文化は漢文によって成り立っていること、漢文抜きでは日本の学術文化は存在し得ず、且つまた漢文の知識抜きでそれらの理解はあり得ない、という、我々全員のほぼ共通する認識があった。その上で、日本における中国学の伝承と日本漢学の関係、日本語・日文学と日本漢文との関連、教科（国語古典）としての漢文、漢文文献の範囲等々、議論は多岐広範に及び、本プログラムの事業推進担当者の間でもいまだに用語と概念の一致を見ていると言いがたい。それは、「漢学」「漢文」「漢文学」から受け取るものが、人によってさまざまに異なるからである。だが、厳密な定義はともかく、我々が研究教育の対象とするもののイメージはおおよそ次のようなものとして、ほぼ共通の理解ができてきつつある。

古来、日本人が古典中国語を日本語で読み下す日本独自の訓読法によって摂取してきた中国学のあらゆる分野の著述、且つ又古典中国語を模倣して表現してきたあらゆる分野の日本人の著述。

言うまでもなく、古典中国語とは漢字を媒体とする中国語の古語、それも書き言葉を主体とするものであり、東アジア漢字文化圏にあつてはかつて共通に用いられていた文体である。東アジアの各国はその文体を各国独自の読法（訓読法）で撰取し、「日本漢文」「朝鮮漢文」「ベトナム漢文」などが生まれた。いずれも中国学と密接不可分の関係にありながら、中国学

とは明確に異なるところが「〇〇漢文」の難しいところであり、興味深い点でもある。

用語だけの面から言えば、私の個人的な感覚かもしれないが、「漢学」というと、「中国学、経学を主とした学術」といった色彩がつよくなるように思うし、「漢文学」の場合には、漢詩漢文の文学面だけが強調されてしまう。実際には、訓読法を基礎とする「日本漢文」によって支えられている諸学問・諸芸術・諸文化すべてを対象とする学問と言いたいのであるが、それをどのように表現すればよいのか分からない。議論を重ねた結果、「日本漢文による学術文化」という意味で「日本漢文」＋「学」と、いささかこじつけめいた命名により、新たな研究教育拠点計画の作成に入った。それが、平成十六年（二〇〇四）に申請した「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」である。

平成十四年に始まった文科省の二十一世紀COEプログラムは、平成十四年度・十五年度で十分野にわたり合計一〇六大学、二四六件の研究教育拠点を採択し、平成十六年度は総括的な分野として「革新的な学術分野」一つで募集が行われたのである。この年の申請は一八六大学三二〇件、採択は二四大学二八件、我々のプログラムは、以下の理由を付して採択された。

「記紀時代より戦前まで、漢文またはその読み下し文は日本の叙述作品の過半を占め、日本文学の中心軸であったにもかかわらず、戦後は日本文学の対象としては疎んじられ、また、漢文の読解そのものも中国語の普及とともに、衰退しきつている。これは日本文化の理解のためには、極めて危惧すべき事態である。二松学舎大学はこの趨勢の中で、漢文教育を堅持している希少な大学である。日本学としての漢文研究を振興するために、本拠点形成計画は極めて重要である。」

この評価は、我々を大いに勇気づけてくれた。

かくて、本プログラムは平成十六年の後半から動き始めたが、計画推進に当たって、我々は次の四つの柱を立てた。

第一は、日本漢文学に関する文献学又は書誌学的な事業であり、関連文献の所在調査を国際的な規模で行い、これらの文献情報をデータ・ベース化して公開することである。この事業は、他の諸機関・コレクションのデータ・ベースとのリンク

によってデータの量と質の拡大充実をはかり、いわば日本漢文学研究のための基礎的情報の世界的拠点づくりである。なお、この計画の中には、研究文献目録及び基礎的文献の本文のデータ・ベース化をも含んでいる。

第二の柱は、研究者の国際的なネットワークづくりである。国内外の日本漢文学の専門研究者を広く招聘して行うシンポジウムや公開講演会、及び関連する国際会議や研究集会等への本プログラム担当者の派遣等により、研究者相互の情報交換と共同研究を行うものである。本誌『日本漢文学研究』の刊行は、ここに属する事業である。

第三は、大学院研究科の通常の講義・演習並びに学外の人々にも公開する特別講義・演習等による若手研究者と書誌学専門技能者の養成である。COE研究員として若手研究者を養成することをも含む。

第四の柱は漢文教育で、日本における漢文教育の歴史的研究、各国の漢文教育（日本古典又は中国古典）の比較研究、さらには大学で使用する漢文教育のテキスト（漢文教科書）の編纂を行う。

上述のように、本誌は直接的には第二の柱の研究者のネットワークづくりに属するものであり、我々事業推進担当者のみならず国内外のこの分野の研究者が、研究・調査の結果を国際的に交流し合う場を提供することが主たる目的である。当然、本誌の内容は上記四つの柱全体にかかわるものである。本誌を通じて、日本漢文学研究のネットワークが広がり、本学がその世界的拠点としての役割をはたし、日本漢文学研究が一層深化し高度化すること、これが本誌刊行のねらいである。

なお、本誌の用語は、日本語と英語を使用する。編集の過程では中国語を加えたらとの意見が出されたが、あえて日本語と英語に限定したのは、日本漢文の研究者で中国語を解する人はまだ少数であろうとの判断による。